

日蓮聖人と涅槃經

日蓮聖人遺文に引用された大般涅槃經を

中心とした涅槃部經典について

久住謙是

はじめに

日蓮聖人が正依の法華經に次いで涅槃經を依用されたことは周知のことである。この場合の涅槃經とは、いわゆる大乘涅槃經であるところの大般涅槃經四十巻を指していることも知られている。

しかし、日蓮聖人も指摘されているように大般涅槃經に類似した經典群が存在していることである。

釈尊の入涅槃を主題にした、それらの涅槃部經典は、日蓮聖人において六巻泥洹經を中心として、御遺文にいくつかの經典をあげることができるのである。

ここでは、これら涅槃部經典の所説のどのような内容を、いかように引用しているかという文献的な手続きによる考察を試み、その經典を引用しているかぎり、思想的には深い関連が予想されるという前提から、涅槃部經典の諸思想と宗祖の主張される思想との間に、どのような関連を汲みとることができるのか。そして、それは大般涅槃經を引用された日蓮聖人の思想的傾向と、どう関わりあうか、その一斑を考察してみたいのである。

日蓮聖人引用の涅槃經

日蓮聖人御遺文のうち、御真蹟の現存・曾存、または、

直弟子の書写になる古写本の存在するものの中で、「涅槃經」と指す場合は、曇無讖訳の四十卷本・大般涅槃經を示していることは疑いのないところで、「大経」註①・「双林最後の涅槃經」註②・「仏遺言」註③等と異称して引用するところでもある。

しかし、涅槃經が、まったく四十卷大般涅槃經のみを指しているとは限らないことは、はじめに述べた如くであって、文献的には複数の經典のあることを弟子・信徒に書き送っているのが散見されるのである。例えば「千日尼御返事」には、

「末と申は大涅槃經、此も月氏、竜宮等は知らず、我朝四十卷・三十六卷・六卷・二卷等也」註④
と、記すところである。

この、四十卷本が大涅槃經で日蓮聖人が最も依憑されたいわゆる「涅槃經」で北本といわれるものである。註⑤三十六卷本とは、四十卷本を、次ぎに示す六卷泥洹經と照合して研究に使ならしむために調縮した南本と称せられるものである。註⑥六卷本とは、正式には大般泥洹經といひ、本稿で後述する御遺文引用に認められる重要な經典である。註⑦最後の二卷本とは、大般涅槃經が、經典の内容からみて完結されていないという理由で北涼の曇無讖末の慧観も求めて果さなかつた唐の若那跋陀羅訳・大般涅槃經後分とよばれる後訳荼毘分である。註⑧

日蓮聖人においては、涅槃經と指す場合は、さきの大般涅槃經一經にかぎる例と、この四部の経々を見做す広義の受け取り方があるように考えられる。「法華題目抄」には

「是も梵本多之」註⑨

として、漢土に、六卷大般泥洹經と四十卷本大般涅槃經が伝えられたが、伝訳されない異種梵本經典が多く存在していたと推察し、述べておられるところである。

今日、伝えられている涅槃部經典と目される多数の経々から類推しても、当時、すでに釈尊の入涅槃に關説した經典が、多く存在していたことは、疑いのないところである。

涅槃部經典とは、日蓮聖人が涅槃經とよんで四部をあげて広義に受けとられたものではない。それらを含めて、釈尊の入涅槃に關する内容を持つ、さらに広げられた經典群を指すものである。しかし、一定のカテゴリーに従って呼称されたものであるが、歴史的・主観的に変化して、その選択の内容とそれに伴う經典の数が大いに異ってきているのである。

今、ここで、日蓮聖人御遺文引用に適用される涅槃部經典のカテゴリーを明確にしておく必要がある。

唐の智昇の作つた「開元釈教録」には、六部を数えるにすぎず、「縮刷大藏經」では十六部をあげ、「大正新修大藏經」では二十三部と異なり多数にのぼる。「開元釈教

録」や「縮刷大藏經」では、小乗と大乘とに區別して、大乘菩薩藏の涅槃部にかぎり、さらに「縮刷大藏經」は如来常住を説く經典は、みな涅槃部に入れるとするために、「開元釈教録」より十部の増加となる。

「大正新修大藏經」が、二十三部とするのは、大乘・小乗の別なく、經典の内容が、主題を闡説している多くの經々を列挙しているからにはかならない。

横超慧日氏は「大正新修大藏經」第十二巻に収められている二十三部のほかに、小乗涅槃經として、パーリ語 Mahāparinibhāṇa-Suttanta があり、これに相当する漢訳經典の遊行經をはじめとする四部が、同上・第一巻、阿含部に収められているものも含むべきで、都合二十七部になると主張されている。註④

この阿含部の四經、および大般涅槃經後分は、史上の釈尊の死の前後、歴史的事実を取りあげ、入涅槃を主題として伝記的に叙述されている。

一般に大乘涅槃經とよぶ場合、釈尊の入涅槃を説時の契機として、如来の永遠性・仏性の普遍性という二本の柱を教説して、史伝的・思想的に前者の小乗涅槃經を踏まえて大乘思想に高められた曇雲識訳の四十巻大般涅槃經と法顯・仏駄跋陀羅共訳の六巻大般涅槃經を指している。

両經は全く同系のものであって、六巻大經涅槃經は、四

十巻大般涅槃經の前十巻に相当するものであると考えられてきた。しかし、河村孝照氏は、大筋は相応するものであると前提しながらも、両經に越え難い説相・素材の相違が認められるとして、六巻大般涅槃經は、むしろ大乘涅槃經の成立史的に原初的な形態を有し、四十巻大般涅槃經は、さらに三十巻を加えて一闡提の例にみられるように、如来藏説・常楽我淨説・仏身論等に関して思想的に完成させたものである、と論ぜられている。註⑤

涅槃部經典は、大乘經と小乗經で大別され、それらが主觀的に取捨されてきたが、ここでは、釈尊の入涅槃に關説した經々を網羅し、主題の一部を布衍する支本、および、その異訳本なども含んで形成されている二十七部の横超慧日氏の説に従って所論を進めることにする。この場合、日蓮聖人が、これら涅槃部經典と意識された引用であったか否かは、おのずから問題を異にするものである。

日蓮聖人が、御遺文に引用された涅槃部經典は、先きの説に依って示された二十七部の内、次のような經々が認められる。

- (1) 北凉曇無讖訳 大般涅槃經四十巻
- (2) 宋慧嚴等依泥洹經加之大般涅槃經三十六巻
- (3) 東晋法顯・仏駄跋陀羅共訳 大般涅槃經六巻
- (4) 唐若那跋陀羅訳 大般涅槃經後分二巻

(5) 高齊那連提耶舍訖 大悲經五卷註^⑫

(6) 蕭齊曇景訖 摩訶摩耶經二卷註^⑬

(7) 隋那連提耶舍訖 蓮華面經二卷註^⑭

(8) 姚秦鳩摩羅什訖 仏垂般涅槃略説教誡經一卷註^⑮

(9) 姚秦竺仏念訖 大雲無想經註^⑯

(10) 失訖 仏説法滅尽經一卷註^⑰

等である。十部を教えることができるのである。

(4) の大般涅槃經後分二卷は、文永十年(一二七三)、日蓮聖人が佐渡より鎌倉の弟子、日昭上人に宛てた弁殿尼御前御書に

「三郎左衛門尉殿に候文のなかに涅槃經後分二卷、(中略)御隨身あるべし」註^⑱

と、配流の地から、典籍を求めておられ、特に經名を指示して持参するよう促されているところからして、重要な意図があったと考察されるが、その後の著作・御消息の引用に認められないのである。

翌年の文永十一年に抄録されたと思われる手控の涅槃經要文中に所引の文を見ることができるとは、所覧になりながら引用に及ばなかった涅槃部經典の例もあるのではなかったかと忖度されるのである。註^⑲

(1)・(2)はすでに問題としたところで、残りの涅槃部經典のうち、(5)・(6)・(8)・(9)は、一般的な引用で特にその經典の思想が、日蓮聖人の主張に強く反映されるといったもの

ではなく、他經と並列的に用いられ、通仏教的な内容が引かれてゐる。

それにひきかえ、(3)・(7)・(10)は、涅槃部經典の一部に加えられる主題が、日蓮聖人に比較的顧慮され、依用されていると言えるであらう。

これはまた、大般涅槃經引用の日蓮聖人のいわゆる日蓮的依用の傾向、涅槃經引用と一脈通ずるところも指摘され得ると考えられるのである。すなわち、

(7)の蓮華面經は、ただ一箇所の典拠で、撰時抄に、

「仏告阿難、譬如師子命終、若空若地若水若陸所有衆生

不敢食師子身^ニ、唯師子自生諸蟲自食師子之^ニ、阿難我之

仏法非余能壞^ニ、是我法中諸惡比丘破我三大阿僧祇劫積行勤

苦所集仏法」註^⑳

と、依用するところであるが、日蓮聖人は經の文意を汲んだ。

「師子身中の蟲の師子を食」註^㉑

の語を専ら、正法を破る根源は、仏弟子の中にこそ存在して最も恐るべき「蟲」と把握されるのである。彼等は個人的に戒を破り、悪行を重ねる僧を指すことではなく、諸宗の元祖や天台宗の慈覺・智証等、ならびに諸大寺の高僧の法華經を否定する高德と仰がれる人々を指したことは、彼等を邪智謗法の根源とみ、みずから仏法を破滅させる根本

と扱えられるのである。

(10) 法滅尽経は、題名が示す通り、さらに涅槃経の主題の一である。末法思想を徹底させた釈尊入涅槃後の末世の狀態を、日蓮聖人は、この経を依文として例示するところである。

「五濁悪世魔道興盛、魔作沙門壞乱吾道」乃至「悪人転多如海中沙。善者甚少若一若二」

「真言諸宗違目」、「開目抄」、「報恩鈔」註²²などに援引されて、末法には、僧は墮落を極め、仏法はついに滅乏するに到るであろうと説く、法滅思想を正法の危機意識として実感され、異義・邪説の横行する宗教的・社会的乱世にこそ正法の死身弘法を願業とされた日蓮聖人の眼には、誹謗正法の者は恒河の砂の数よりも多く、まことに法華経を信じて、仏に成れる者はその一・二粒と見て取ったことであろう。

あたかも、大般涅槃経三十三卷迦葉菩薩品第十二に説く

「如瓜上土」に相似した文といえるであろう。註²³

大般泥洹経は、先述した通り、涅槃部經典中、大般涅槃経と共に大乘思想を説き、大般涅槃経に次いで、日蓮聖人に重視され、思想と行動の上に大きな影響を与えていると考えられる。

そして、大般涅槃経と対等というより、むしろ同一視された涅槃経観とさえ窮められるところでもある。法華経の行者が、末法に、この経の所説をみずから行じ、証明しているのであるという信仰にまで高められたその邂逅と自覚を語っておられるのである。

主な引用文をあげるならば、第六卷・問菩薩品第十七

「不見究竟処者、不見彼一闍提輩究竟惡業」註²⁴
同じ、同品に

「有似羅漢一闍提而行惡業似一闍提阿羅漢而作慈心。有似羅漢一闍提者是諸衆生誹謗方等。似一闍提阿羅漢者毀譽声聞広説方等語衆生言我与汝等俱是菩薩。所以者何。一切皆有如来法故。然彼衆生謂一闍提等云云」

等の文が、「開目抄」、「撰時抄」などの主要な著書に引用されている。註²⁵

日蓮聖人が、法華経を否定する者、信ぜず誹謗する者を涅槃経に説く「一闍提」の語をもって規定された。すなわち、一闍提をもって仏種を断ずる者、宗教的罪惡の根源を衝いている。

そして、(7) 蓮華面経に引用された、いわゆる、宗教的エリート、世間的に尊敬される指導の高僧の異義・邪説が「師子身中の虫」であり、換言すれば、末法における阿羅

漢のように悟り顔をして内実には、正法誹謗の人々を指して一闡提とよんだのである。

大般涅槃經三十三卷・迦葉菩薩品第十二

「菩薩於惡象等心無恐怖、於惡知識生怖畏心。為惡象殺不至三趣。為惡友殺必至三趣」註²⁶

と續説するように、これら異説をもって正法を惑乱する邪智・邪師を、三類の強敵の第一と、もっとも恐れた顯著な引用文である。そして、(10)、法滅尽經の引用された、「魔作沙門壞乱吾道」が、まさしくその上に説く、「五濁惡世魔道興盛」の末法を現出せしめる惡因と認知せられたといえよう。

さらに注目される引用文は、第四卷・四依品第九の

「過去曾作無量諸罪種種惡業。是諸罪報、或被輕易、或形狀醜陋、衣服不足、飲食羸疎、求財不利、生貧賤家邪見家、或遭王難、及余種種人間苦報、現世輕受斯由護法功德力故」註²⁷

である。この文の下に、次のような自釈を加えておられる。

「此經文日蓮が身に宛も符契のごとし。狐疑の水とけぬ。千万の難も由なし。一一の句我が身にあわせん。乃至、今また日蓮強盛に国土の謗法を責れば此大難の来るは、過去

の重罪の今生の護法に招き出せるなるべし。」註²⁸

日蓮聖人の大般涅槃經との出合いは御遺文の引用に依るかぎり、「開目抄」が最初である。文永九年(一二七二)二月佐渡塚原に於て著作された「開目抄」を待つて初めて所引された。生命にかかわるたび重なる大難が、法華經の行者・仏使上行菩薩の自覺を確立させていった。と同時にまた、「開目抄」において初めて、過去の宿罪を今生に滅すという、みずからの謗法による值難觀を、大般涅槃經との邂逅によって見出したと言えるであろう。

涅槃經を基礎とする值難と滅罪の自覺

流罪の地、佐渡にあつて、靜かに法華經の行者の思索を深め、思想の確立をみる重要著書の成立する過程で、論釈を退けて専ら經文をもって実証してゆく姿勢が、これにも看取されるのである。

「開目抄」の略本といわれる「佐渡御書」には、さらに釈を加えられているのが認められる。煩を厭わず次にあげらるならば、

「此經文は、日蓮が身なくば、殆ど仏の妄語となりぬべし。乃至、この八句は只日蓮一人が身に感ぜり、乃至、法華經の行者を過去に輕易せし故に、法華經は月と月とを並び、星と星とをつらね、華山をかさね、玉と玉とをつらねたが如くなる御經を或は上げ、或は下て嘲哂せし故に、此

八種の大難に値へる也。此八種は尽未來際が間一づつこそ現ずかりしを、日蓮つよく法華經の敵を責むるによつて一時に聚り起せる也、乃至、斯由護法功德力故等是也。」註②③

日蓮聖人が、法華經の行者の受難を、このように受けとめ、法華經弘通に由來することは論を待つまでもないが、大般涅槃經によつて、御自身の宿罪に起因することを明らかにし、強盛なる護法の功德によつて現世に軽く受けるのである。と説示する王難をはじめとする具体的な種々の受難が、一身上に予言されたように一一合致する。日蓮聖人をして、「此經文は、日蓮が身なくば、殆ど仏の妄語となりぬべし」と、さえ言わしめているところである。

日蓮聖人の法難の統起が、法華經の行者は何故にこのような危難を蒙むるのか、佐渡に在る日蓮聖人の値難に対する正当性が求められていたことは、「寺泊御書」等にも記されているところであつて、註②「開目抄」が著作される動機は、すでに言われているように「法華經の行者とは誰であるか」の闡明である。それは、とりもなおさず、値難觀の闡明でもある筈であり、それは、法華經の行者の自覺へと導ぶく理論でなければならぬ。法華經第五卷勸持品の偈文の色説・同七卷不輕菩薩品の實際を一身に具現されたことが、法華經に予言された受難であり、法華經の眞実の証しであり、しいては法華信仰の証しとして正当化し、闡明されたのである。

これは、「開目抄」における重要な値難觀の宣示である。しかし、先述しきつたように法華經の行者の自覺と共に、行者の滅罪の反省の一面も、法華信仰の証しとして自ら内なる破折として把えられる。謗法の業報に對して、むしろそれを甘受し、それによつて自らの行業の好縁と転化してゆく「転重輕受」の理論が、大般涅槃經の「護法功德力故」の文に依拠して展開されてくる面も見逃せない問題といわなければならない。

この滅罪の値難觀は、佐渡流罪以後、日蓮聖人門下の迫害・弾圧に耐えて信仰を貫いた人々にも教示され、その覺悟を求めて、法華信仰の強盛の証しとされているのである。「兄弟抄」には、「過去の謗法の罪滅せんとして邪見の父母にせめられさせ給。乃至、經文明々たり。經文赫々たり」註④

と、迫害が正法を信奉する功德によつて起る意味を強調し、不退轉の決意を促されているところである。

以上によつて、大般涅槃經が、末法における誹謗正法の一闡提の具体的な方を示しながら、正法護持者の値難の理論づけを的証して法華經の行者の弘教実践の支えとなつたことは歪めない事実である。

法華經の命を贖う重宝

さらに、この經が、大般涅槃經の一貫して御遺文に引用

され来ったに對して、佐渡流罪を契機として、「開目抄」に突如として引用され、以後の思想に影響を与えたことも、これまた注目されるであらう。

然して、大般涅槃經の引用は、壽命品第一・如來性品第四を中心、前十卷に集中して引用され、如來常住・一切衆生悉有仏性の思想が、法華經を援証する教判論を踏まえて、涅槃經成立の根底をなす、積尊入涅槃後、仏法は如何になるかという深刻な法滅思想が、縷述され、一闡提等のみられる末世の謗法の具体的説相が、日蓮聖人に一々事実として符合し深い共感を与え、教判論や論理を展開させる依用より、むしろ正法護持思想の具体的行業実践の菩薩行に用いられた經証せしめていった依用傾向は、通じて大般泥洹經六卷にも言えるであらう。

正法護持思想が、涅槃經の諸種の教理的説示を、日蓮聖人の弘教実践の場の考え方として表現されてゆく、その過程において、大般泥洹經の所説が撮取引用されて、いわゆる、「涅槃經は、法華經の命を贖う重宝」たり得たといえるであらう。註²⁰

以上によつて、涅槃部經典の日蓮聖人の御遺文に引用された十部の内、涅槃を主題としながらも注目された引用は大般涅槃經・大般泥洹經・法滅尽經・蓮華面經の四部にかぎられ、特に大般泥洹經が、大般涅槃經に次いで重視され、日蓮聖人の涅槃經觀を考察する上で顧慮されなければなら

ぬ涅槃部經典であることを指摘しておきたい。

註

- ① 定遺七九・四一四・四一八・五六九頁
- ② // 二六二・三六二・四〇〇・五八四頁
- ③ // 四九九・五八四頁
- ④ // 一七五九頁
- ⑤ 大正藏第十二卷三六五頁以下
- ⑥ // 六〇五頁以下
- ⑦ // 八五三頁以下
- ⑧ // 九〇〇頁以下
- ⑨ 定遺三九六頁
- ⑩ 横超慧日著「涅槃經」二九頁
- ⑪ 日本印度學佛敎學研究
- ⑫ 大正藏第十二卷九四五頁以下
- ⑬ // 一〇〇五頁以下
- ⑭ // 一〇七〇頁以下
- ⑮ 大正藏第十二卷一一一〇頁以下
- ⑯ // 一一〇七頁以下
- ⑰ // 一一一八頁以下
- ⑱ 定遺七五二頁
- ⑲ 立正安國會編日蓮大聖人御眞蹟對照錄下卷二六三頁
- ⑳ 大正藏第十二卷一〇七二頁、定遺一〇五〇頁
- ㉑ 定遺一〇五一頁など

②② 大正蔵第十二卷一一一八頁、定遺六三九・五五五・一二二四頁

②③ 大正蔵第十二卷五六三頁A

②④ // 八九二頁B

②⑤ // 八九二頁C 定遺五九一・五九七

一〇六〇頁

②⑥ 大正蔵第十二卷四九七頁C

②⑦ // 八七七頁C

②⑧ 定遺六〇二頁

②⑨ // 六一六頁

③① // 五一四・六一八頁

③② // 九二四頁

五一三頁

編集後記

「現代宗教研究」第六号は、特集を二つくみました。最も緊急な課題の一つである公害問題に、日蓮宗徒として対処していく精神的態度と現状把握を示そうとしたものです。公害をなくす実践に大いに活用されることを望んでいます。

また、東北の宗教構造の解明は、東北における教化活動や本宗のあり方を考える基本的背景を提示しようとするものです。東北の教師各位がこの調査をうけとめ、布教と社会実践の一助とされるよう期待します。もちろん、東北だけでなく全国各地の宗教構造に関する分析調査を随次行ない発表していく予定です。

ベトナム仏教徒との対話からは、現代に生きる信仰と平和への実践の姿がうきほりにされていますが、同時に、信仰と社会実践の結合こそ大事な柱であることが確認できると思います。真のベトナムの平和とベトナム仏教徒との一層の交流が強く望まれます。

今回から研究ノートを掲載しました。日蓮聖人と涅槃経については、まだ充分研究されておらず、その意味からも久住研究員の論考を一読されるようお願いいたします。